

先週私たちは、テサロニケとベレヤにおけるパウロたちの宣教について見ました。その両方の町で、同じようにユダヤ人と神を敬うギリシャ人、また貴婦人たちが信仰に入ったわけですが、でも、そこには違いもありました。それはそれぞれの町に住むユダヤ人たちとの間にあった違いです。つまり、ベレヤのユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人よりも良い人たち（素直）で、彼らは非常に熱心にみことばを聞きました。そして、毎日聖書を調べたというのです。それゆえに、彼らのうちの多くの者が信仰に入りました。私たちは、そこからみことばに対する態度、熱心さが、私たち自身の信仰に大きな影響を与えるということを見たのです。

さて、パウロたちがベレヤで宣教を続けていると、それを知ったテサロニケのユダヤ人たちが、迫害を目的にそこにもやって来たましました。それゆえに、パウロは、シラスとテモテと別行動を取ることにし、ベレヤの兄弟たちに案内されてアテネへと向かうのです。🗺️前の地図を見て下さい。アテネの町は、ベレヤの南約 400 キロのところにあります。この町は、ギリシャのアッティカ地方の首都で、ギリシャ文化の中心地でした。自由都市として、アレオパゴス評議員による自治が行われていました。

16-17 節「さて、アテネでふたりを待っていたパウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。17 そこでパウロは、会堂ではユダヤ人や神を敬う人たちと論じ、広場では毎日そこに居合わせた人たちと論じた」。すでに見たように、パウロがアテネに行ったのは、それが最初から計画にあったからではなく、迫害を逃れるためであったわけです。そこでシラスとテモテを待つ間に、アテネの町を見て回ったパウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じます。それゆえに、会堂では、ユダヤ人や神を敬う人たちと、また広場ではそこに居合わせたアテネの人々と論じ合うのです。

22 節のパウロの言葉からもわかるように、アテネの人々は、宗教心にあつい人たちでした。この町には偶像があふれていたからです。でも、拝む対象に問題がありました。当時、アテネには三千にも及ぶ宗教施設があったと言われますが、それでも足りないかのように、そこには「『知られない神に』と刻まれた祭壇」もあったというのです。彼らはなぜそんなにも多くの偶像を必要としたのか？それは無知のゆえ、彼らは拝むべき方を知らなかったので、自分たちの手で神々を造りました。ですから、そこには哲学者たちも多くいたのです。

ここで 18 節に出て来る、エピクロス派とストア派について見たいと思いますが、エピクロス派とは、エピクロス（前 341 年-270 年）という人によって始められたもので、彼は、快樂が人生の究極的な目標と考え、その最たるものは、心を乱す情熱や迷信的恐怖、苦痛などから解放された、静かな生活であるとしました。神々の存在は否定しませんでした。神々は人間の生活には何ら興味を持っていないというのが彼らの考えです。

ストア派とは、ゼノン（前 340-265）を開祖とします。彼らは、理性の優越性を主張し、汎神論的に（神と宇宙、または神と自然とが同一であるとみなす哲学的・宗教的立場）、神を普遍的（すべてに共通する）な霊魂であると考えました。その倫理の特徴として、道徳的熱意や高貴な義務感があげられます。

彼らのうちの幾人かが、この時、パウロと論じ合っていました。主イエスと復活について聞いた時、彼らはアレオパゴスにパウロを連れて行き、そこでパウロの教えていることについて知ろうとします。ちなみに、このアレオパゴスとは、アテネの軍神アレスにちなんで名づけられた丘のことで、そこで著名な市民による評議会が開かれ、裁判、行政、教育問題に携わっていました。パウロがそこに連れて行かれたのは、アテネ市内で教えることの可否を決定するためであったようです。

そのようにしてアテネの人々の前で語る機会を得たパウロですが、そこで彼が語ったことが 22 節以降に記されています。もちろん、この時のアプローチの仕方は、ユダヤ人に対してするように旧約聖書からではなく、天地の造り主である神を語るというものでした。まずパウロは、アテネの人々の関心を集めるために、あらゆる点において彼らが宗教心にあつい人たちだと語りかけます。そして、その彼らの宗教心に訴えかけるように、神様のことを伝え始めるのです。つまり、彼らの神々の一つであった「知られない神」を持ち出すことで、彼らがすでに知らずに拝んでいる、その「知られない神」こそ、自分の宣べ伝えている神であるといいました。

24-27 節「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。25 また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物をお与えになった方だからです。26 神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界をお定めになりました。27 これは、神を求めさせるためであって、もし探し求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。

アテネの人々が知らずに拝んでいるのは、天地の造り主であるとパウロは言います。この世界とそこにあるすべてのものは、この方によって造られたと。ですから、そのような方が、人のつくった宮などに住まれることはなく、また何か不自由でもあるかのように、人によって仕えられる必要もない、というのです。この方が人を創造されたのであって、人によってこの方が造られたのではないからです。この天地の造り主こそ、すべての人を造り、これにいのちと息と万物をお与えになられた方です。

それだけではありません。ひとりの人、アダムからすべての国の人々を造り、地の全面に住ませた神様は、それぞれの時代とその住まいの境界線をお定めになりました。つまり、この世界は、すべて神様の御手の中にある、神様によって治められている、ということです。だれもその定められた時代や境界線を越えることはできません。でも、その中で、人が自分を越えた存在を探し求めることでもあるなら、神様を見いだすのです。主が、ご自分の造られたこの世界、つまり、私たち一人一人の近くにおられるからです。

パウロは、そのことを深めるために、ここでギリシャ人たちの詩人のことばを引用します。28 節「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、『私たちもまたその子孫である』と言ったとおりです」。これはクレテの詩人エピメニデスとアラトスという人の詩ですが、パウロはこれらの詩を上手く使うことで、私たちがみな神様に造られた者としての子孫であり、この方の中で生き、動き、存在していることを説明するのです。それゆえに、29 節にあるように、アテネの人々をして、そのような神様を、人の技巧や工夫で造った金や銀や石などの像と考えるのは、おかしなことだとパウロは言います。

では、どうでしょう？ 私たちは、神様のことをそのように考えることはないですか？ 神様のことを手で作った像のように考えることはなくても、この方を宮の中、つまり、私たちでいうところの教会という建物の中に閉じ込めてしまうことはないですか？ それゆえに、教会に入ったら、神様が近くにおられ、教会を出たら、遠くに考えるということはないですか？ そのようなところから、いつでも、どこでも、私たちは主によって見られ、またすべて知られているのに、私たちの方では神様を無視し、自分中心な歩みをすることはないですか？

また、奉仕に関してはどうでしょう？ 奉仕をする時に、神様のためにそれをしてあげているというような考えや態度をもったことはないですか？ 「これだけしたから、何かください」とか「なんで私がここまでしなくてはいけないのですか」と、どちらが神かわからない言葉をつぶやいたことはありませんか？ 自分が奉仕しないと、主と主の教会がどうにかなってしまうかのように考え、フラストレーションを貯めることはないですか？

私たちが信じ、救いの望みを置いている方は、天地の主です。この世界を無から創造されたお方です。ですから、たとえ私たちがいなくても、神様はご自身で満ち足りておられる方です。そして御心のままに、すべてを導かれます。では、そのような方が近くにおられ、すべての被造物を通して、ご自身を証しておられるのに、人がそれを無視し、手で造ったものを神としてあがめているなら、神様はそれをどう思われるでしょう？ もちろん、喜んでおられるはずがありません。ですから、30 節にこう続きます。「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます」。

神様は、そのような無知の時代を、人々がご自分を無視することを見過ごしておられました。でも、それは過ぎ去った時代においてであって、もはやそうではないのです。なぜなら、神様は、どこでもすべての人が悔い改めることを、つまり、ご自分に立ち返ることを命じておられるからです。パウロがこのように言う根拠はなんですか？ なぜ神様は、それまで見過ごしておられたように、その後も見過ごされないのでしょうか？

31 節「なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人

にお与えになったのです」。このようにパウロが悔い改めを語る理由、それは神様が、この世界をさばく日を定めておられるからです。「この世界」とは何ですか？それは無知ゆえに、造り主である方を神として認めず、むしろ、自分が神であるかのように考えることで、自分の善悪の判断こそ、正しいとする私たち人間のことです。神様は、そのようにしてご自分から離れ、自分勝手に歩むすべての人をさばかれるというのです。

ところが、そのさばきは、神様が「お立てになったひとりの人により義をもって」とあります。このひとりの人とは、言うまでもなく、主イエスを指しているわけですが、では主イエスにより「義をもって」とはどういうことでしょうか？義とは、「正しさ」を意味しますが、もし神様がご自身の義、その正しさによって私たちをさばかれるとしたら、どうですか？神様の絶対的な正しさの前に、自分の正しさを誇れる人はいますか？だれひとり、主のさばきの前に、無罪宣告を受ける人はいないのです。

それゆえに、神様は、ひとりの人としての主イエスを立てて下さいました。私たちの義ではなく、彼の義によって、この世界をさばくためです。つまり、私たち人のうちには神様に認められるような正しさはありません。みな罪人だからです。でも、その罪人をあわれんで下さるゆえに、神様は、罪のないご自分のひとり子を罪人の代表とし、私たちの代わりに彼を十字架にかけて殺すことで、それを私たちに対するさばきとして下さいました。彼の死によって、私たちを赦すため、彼の義によって私たちを義なる者として下さるためです。

でも、もし主イエスが十字架の死で終わっていたなら、どうでしょう？それでは、神様によって立てられた者としての十分な証拠とはなりません。でも神様は、主を死者の中からよみがえらされることで、ご自分がお立てになったキリストと証されたのです。そのようにして、この世界を主により彼の義によってさばくことを確かなものとされました。

このパウロのメッセージを聞いた人々の応答は [32-34 節](#)。「死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、『このことについては、またいつか聞くことにしよう』と言った。33 こうして、パウロは彼らの中から出て行った。34 しかし、彼につき従って信仰に入った人たちもいた。それは、アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、ダマリスという女、その他の人々であった」。

ここに主イエスと復活のことを聞いて、あざ笑い、それを聞き流した人々がいたように、今日も、私たちの信仰をあざ笑う人、興味を示さない人はいます。でも、ここでパウロが語らなければ、アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、ダマリス、その他の人々が信仰に入ることがなかったように、私たちが語らなければ、悔い改める機会を得ない人々がいるのです。彼らは、その無知のゆえ、主イエスの義なしに、自分の罪に対する神様のさばきをその身に受けることになります。

いかがですか？今日、あなたの家族や知人友人には、主のことが語られていますか？神様がこの世界をさばかれる時、彼らは、そのさばきから救って下さる方を知っていますか？もし彼らに福音を語るのがあなたでないとしたら、誰か他にいますか？神様は過ぎた時代には、人の無知を見過ごしておられましたが、主イエスが来られた今は、彼を信じる者たちを通して、つまり、あなたを通してすべての人に悔い改めを命じておられます。主に立ち返る者がみな、さばきを受け滅びるのではなく、赦しを受けいのちを得るためです。